

# 教育 を 読む

河合文化教育研究所  
主任研究員 丹羽健夫

今年（2013年）の前半年の国民総所得は前年比で約4%のプラスということで、かなりの好感をもって受け止められている。ところが過去に十数年間も、その間2年の例外を除いて10%以上の伸びを続けた時代があったのである。この本の表題「高度成長」の時代である。具体的には1960（昭和35）年から1977（昭和52）年の17年間である。第二次世界大戦の敗戦後の10年の辛苦から立ち直った「高度成長期」に何が変わったのかをこの本は語る。

そのむかし、蒸し暑い夏の夜は、戸をあけて部屋に涼風を通して蚊帳を張って寝たものだ。いまでは空調機器のおかげで、部屋を密閉して安眠できるようになった。

主婦の仕事も合理化された。そのむかし主婦業というものは重労働であった。朝、家中の誰よりも早く起き、竈に火をつけ、ご飯を炊く。枯葉か紙切れにマッチで火をつけ素早く枯れ枝に転じる。火勢を見て薪に転じる。さらに竈の燗を七輪に移し、炭を足し、鍋をかけ、おみおつけ（みそ汁）を作る。キャンプに行くとよくわかるが、炊飯は技術が要るのだ。今は自

動炊飯器や電気機器が主婦に安眠を与えている。

洗濯も大仕事であった。盥に水を張り洗濯板を用いて固形洗濯石鹸で衣類をごりごりとしごく。今は自動洗濯機という強い味方がいる。特に当時は着物を着る機会が多かったので、これが難物だった。洗い張りという半死語がある。着物の縫い糸をほぐしてばばらにして洗い、板などに張って干したのだ。いやはや主婦は大変だったのだ。それが高度成長期の生活機器の技術革新が、主婦にゆとりと時間を与えている。

通信手段も遠方で急ぎの場合は、かつては電報が重用された。電報配達人が息せき切って紙片を届ける。「チチキトク」「タイガクセマルカネオクレ」。電話もちろんあったが、高度成長期以前は電話局の交換手経由であった。「・・さんにおつなぎします、どうぞ」。その電話も所有する家は少なく、隣近所の呼び出しが多かった。いまは遠近を問わず時空を超越した魔法の機械、ケータイがあるしパソコンもある。

交通手段もかつては市電、都電、バスの時代であったが、バスを除い



◀『高度成長 日本を変えた6000日』

吉川 洋著  
中公文庫  
定価 本体800円＋税

てほとんどが地下にもぐった。そのかわり二輪、四輪自動車が我が物顔で走るようになった。豊橋、長崎、広島、札幌などでは市電がまだ生息しているらしいが、永らえんことを祈る。

子供の遊びも変わった。ひとむかし前は紙芝居、メンコ、ビー玉、お手玉、蠟石。遊び場は主に神社やお寺の境内だった。今は家に籠ってゲーム、パソコン、テレビ。そして学習塾。

生産性の向上、技術の進歩は教育にも影響を与える。東京大学工学部の定員は1959年に453名であったものが1967年には845名とほぼ倍増している。

このような工業化に邁進する社会構造の変化は他の産業にも影響を与える。工業化は農家の子供を都会に向かわせる。その結果、農業人口のシェアは1960年に約30%あったものが、1980年には約10%に減少する。

この本がテーマとしている高度成長の6,000日が、まさに日本国の体質を激変させたのである。その間の進歩はあらためて活目に値するが、同時に失ったものについても思いを馳せさせる、彫りの深い本である。